

フィリピン水田土壌 調査の旅から

久馬一剛*
岡川長郎**

京都大学農学部川口研究室で過去数年来行なわれてきている東南アジア水田土壌の調査研究計画の一環として、本年1月はじめから3月上旬にかけてフィリピンでの現地調査を行なった。川口教授と、フィリピン政府農業および天然資源省の土壌局長 Atanacio Simon 氏との間で昨夏来予備的な打ち合わせが行なわれていたこと、また1966年にマニラ周辺の水田土壌について予備調査が行なわれ、すでにその報告書が土壌局宛提出されていたことなどから、今回のいろいろな便宜供与などの折衝は非常にスムーズに運び最初の1週間でスケジュールの作成、各出先機関への連絡などの準備が完了した。非常に順調なすべり出しだったといえる。ここで川口教授は主要な出先機関を先まわりして、挨拶と便宜供与の依頼をし、かつ調査地点の予察的調査を行なって、約3週間で日本に帰られ、われわれ兩名はスケジュールに従って、中部ルソン、北部ルソン(カガヤン低地)、パナイ島(イロイ

* 京都大学東南アジア研究センター

** 京都大学農学部

ロ州)、ミンダナオ島(ダバオおよびコタバト地域)、レイテ島(タクロバン周辺)、南部ルソン(ビコール地域)の順に調査とサンプリングを行ない、約2カ月で無事予定の調査計画を完了した。

ここでは、われわれの経験の中からフィリピンで野外調査を行なう際に知っておけば役に立ちそうなことを書いて、読者の参考に供したいと思う。

入国管理・税関など

入出国に関して公用旅券所持者は全く問題がない。しかし一般旅券の場合にはいささか注意が必要である。一般旅券所持者のもらうビザは滞在59日までならそのまま何もなくてよいが、60日以上フィリピンに滞在する場合には、まず3カ月(入国後)有効のビザに切り替えるために25ペソ(1ペソ≒93円)、また外国人登録が必要となるためにその登録関係に約60ペソが必要とされる。これを自分でするのはかなり面倒なためにエージェントに頼むと手数料に50ペソくらい払うことになる。これだけではすまないで、一度外国人登録をした人間が出国する際には Emigration clearance, Tax clearance などにまたまた80ペソくらい(エージェントを通さなくても)とられる。つまり一般旅券で入国した人が60日以上滞在すると、こういう手続きだけで少く見積もっても200ペソ近い金が必要となるということであり、このことは調査計画をたてる際にあらかじめ考慮しておいたほうがよいように思う。

別送荷物がある場合には税関もなかなかうるさく、われわれの場合にもサンプリング用に別送したポリエチレン袋に課税され50ペソほど払わされた。フィリピン政府機関の了解

のもとに入った場合でも、免税扱いをうけるための公式な手続きが3～4週間もかかるというから、短期の調査旅行の場合は実際上そういう手続きをとっているわけにはゆかなくなる。通関手続きもなれない人間には大変なようにみうけられ、結局エージェントを通すのがよさそうである。このための手数料は大したことはない(われわれの場合は10ペソ)。

治安の悪さ

フィリピンに対するツーリストのイメージがよくないということはフィリピン人自身がよく知っている。マニラの日本大使館を訪れると「日本人旅行者に対する注意」というパンフレットをくれる。それにはマニラがいかに物騒な所であるかが例をあげて書いてある。町の中心部の大ホテルの近くで時計やカメラを強奪されたり、タクシーに乗ったら知らぬ所に連れて行かれ金品をまきあげられたり、というような例が非常に多いらしい。ホテルに知人の名をかたって電話をかけ詐欺にかける例も少なくないらしく、現に筆者の一人の所にも、かかる怪しげな電話がかかってきたことがある。われわれも夜マニラの市街を歩く時には、時計をはずし必要な小銭しか身につけないというような注意をした。これらは世界中の大都会になら多かれ少なかれみられることであろうが、どうやら頻度はマニラにおいてかなり高いということらしい。

フィリピンにおける特殊な事情としては中部ルソンにおける治安の悪さが問題であろう。この地域では通称ビートルズのフク団系共産ゲリラと通称モンキーズの反フク団系の右翼テロ、それにありきたりの強盗、牛泥棒のたぐいと大きくはこの3グループが治安を悪くする要因となっているようである。中部ルソンだけで1967年以降未解決の殺人事件が200以上というような新聞記事があったが、連日の

新聞を見ているとこのことが誇張ではないことがわかる。われわれの中部ルソン旅行中にも一夜ライフルの射撃音が聞かれた。これらことから結論できることは、フィリピン、特に中部ルソンでの野外調査には、現地側の協力、案内が不可欠であるということと、もう一つはいつでも足下の明るいうちに安全な都会の宿屋に帰っているということである。この2点さえ気をつけていれば、いかに治安が悪いとはいえそうやたらと事故に会うものではない。

日本人に対する感情の悪さが全く残っていないとはいえないように思うが、これとても現地側の案内をうけて歩いている限りでは特に不愉快な思いをすることはないであろう。

地方旅行事情

治安問題を別にすればフィリピンでの地方旅行は概してかなり快適である。州のキャピタル、あるいは飛行場のある町(非常に多い)などではたいていはバス、トイレット付きの部屋をもった宿がある。田舎町では、これは彼らのいうエージェント(セールスマン)のためのもので、夕方おそくなると空室を見つけるのが困難な場合がある。1人1泊3～8ペソくらいでリネン、タオル、石ケンをくれる。プライベート・バスのないところでは共同のものを利用するより仕方がないが、いつも清潔な所ばかりを期待することはできない。また水道がなく、くみおきの水にたよらねばならぬ場合もある。

食事は多くの町ではフィリピン料理とシナ料理の2種類がたべられる。フィリピン料理というのは一般にわれわれの口によく合うように思う。他の東南アジア諸国の料理にくらべて香辛料をあまり使わず、醤油で味付けしたものが多いいせいか。スルメは各地にあるし、ダバオ付近では sazimi なる刺身の酢漬料理

が普通の食堂のメニューにのっている。田舎の食堂では調理された料理が大皿に盛って置かれているから、それから適宜2～3品を選べば小皿にとりわけて持ってきてくれる。このような田舎の小さな食堂でもかなり清潔に保たれており、たいいていの所で生水もだいたい安心して飲めるように思う。少なくともわれわれは水を飲んで腹をこわしたことがない。食費は朝1.5～2, 昼2～3, 夜3～5ペソくらいみておけば、量も質もだいたい十分であろう(もちろん大都会では高くなる)。ついでに煙草は現地のもの0.3～0.5ペソ、米国の商標をつけているが現地製のもの1～1.5ペソ、輸入もの3ペソくらいであり、他のものと比較して割高である。

交通費はわれわれの場合土壌局のジープで走ったためガソリンとオイル代しかいらなかった。いずれも安くガソリンはレギュラー1ℓが所によって異なるが26～32セントボ(100セントボ=1ペソ)の範囲、オイルは1ℓが0.9ないし1ペソ程度である。

市民の足としては大都市ではタクシーもあるが、ジープニーとよばれるジープを改造して極彩色にかざりつけた小型の乗合バスのごときものやオートバイにサイドカーをつけたものが主であり馬車も依然としてよく走っている。ジープニーは不慣れの場合利用しにくい、台数が多く値段も安い(市内均一10セントボ程度)ので捨てがたい乗物である。

長距離の旅行ではバス、飛行機、船が主たる交通機関であり、汽車は限られた所にしかない(例えば南部ルソン)。汽車に乗る場合に注意しなければならないのは食堂車がないことと、冷房車の場合、朝夕には寒くなりすぎることで、現地人は皆スウェーター持参で乗車していた。バス路線はたいそう発達しており、クラスもいろいろあってエアコン付きのものからトラックを改造した窓やドアのないものまであるが料金は一般に安い。飛行機

は最も長く広い路線をもつフィリピンエアライン(PAL)の他に二、三の会社が運航している。ルソンから南の島々へ行くには実際上飛行機を利用するしか手がない(船もあるが時間がかかりすぎる)。われわれがマニラーイロイローセブーダバオーセブータクロバンーマニラと南の島々をまわった際の航空料金は約240ペソであった。

地図・統計資料の入手

フィリピンには米軍によって航空写真をもとに作られた通称AMS mapの名で知られている多色刷りの5万分の1の地形図があり全国をカバーしている。マニラ市内TanduyにあるBoard of Technical Surveys and Mapsに現金を直接持参すれば1枚1ペソで外国人でも容易に入手できる。ただし完全なセット(約970枚)で買って国外へ持ち出すには外交ルートを通じての許可が必要であるとのことである。この地形図は普通20mのコンターが入っているが、平地部では5m毎の補助コンターが入っており、いろいろな目的に有効に使える。ただし、しばしば地名が変わっていることと、道路の記入などが時に不正確という欠点がある。同じ所で100万分の1の地形図も売っている。

100万分の1の地質図(8枚1セット)はやはりマニラ市内ErmitaのBureau of Minesで入手できる。また250万分の1の鉱物資源図(6枚1セット)も同所で手に入る(1組3ペソ)。土壌図はBureau of Soilsから州単位で出されているが印刷出版されたものについては報告書ともで1部2.5ペソ、ところが、青焼きの手で色をつけたものは地図だけで3ペソということになっている。現在40州くらいの土壌図が10万分の1～25万分の1の予察土壌図として出されている。

Road mapはエッソ、シェル、モービル、カルテックスなど石油会社が出しているもの

を2～5ペソくらいで買える。

ついでながらフィリピンでは売っていないが、25万分の1の地形図は京大東南アジア研究センター資料室にあることを記しておこう。

農業統計などの一般統計資料はやはりマニラ市内の Lopez 通りにある Bureau of the Census and Statistics に行くと頼めば名前を記すだけで無料でもらえる。農業統計では1960年の Census の結果を州別にまとめたものと、それらを1冊の Summary Report としてまとめたものが *Census of the Philippines 1960—agriculture—* という題名で1965年に出版されている。一般統計資料としては *Statistical Handbook of the Philippines* (1965年)、および *Yearbook of Philippine Statistics* があり現在出版されているものでは1966年版が最も新しい。

気象統計はマニラ市 Port 地区にある Bureau of Weather で、ガリ版刷りの温度、雨量統計などに関する資料がいくらか手に入る程度であまりまとまったものはない。

以上とは別に稲作の問題ならば IRRI の農業経済部門でかなりいろいろな source からの統計資料を集めて整理しており、これも頼めばもらえる。

参考書など

フィリピンの自然環境などに関するいくらかでもまとまった参考書を探したが、次の2冊が目にとまったにすぎない。

Robert E. Huke, *Shadows on the Land—An Economic Geography of the Philippines—*(The Bookmart Inc., 1963)

F. L. Wernstedt and J. E. Spencer, *The Philippine Island World—A Physical, Cultural and Regional Geography—*(University of California Press, 1967)

フィリピンの土壌、地質、地形関係の参考文献を探すにはルネタ公園にある National Library, マニラ市 Ermita 通りの Institute of Science Library および Bureau of Mines Library などへ行くことになるが、文献の数は必ずしも多くない。これらの library ではコピー設備もあるが(1枚40～50セントポ)、back number がある場合にはそれを買うほうが一般には安上がりである。他にケソン市にあるフィリピン国立大学(通称 U.P.)の Diliman campus には地質、地理教室があり、またラグナ州ロスバニヨスの U.P. 農学部と IRRI では農業、土壌関係の参考文献が見られる。専門外であるが経済統計などならば、マニラ近郊のマカチにあるアジア開発銀行に行けばかなり整理された資料があるようである。

官庁、公共施設では ID カードの提示を求められることが多く、フィールドに出ている時でも警察などに身分を尋ねられることがたまにあったので、パスポートは常に携帯していることが必要である。

農業関係の役所

農業関係の調査にフィリピンへ行く場合、接触すべき官庁は Department of Agriculture and Natural Resources (DANR)* の中の諸機関であり、それらはマニラ市かその東に接するケソン市かのいずれかにある。われわれが接触した Bureau of Soils のほかに、Bureau of Plant Industry (BPI), Bureau of Animal Industry, Bureau of Forestry などがある。Bureau of Soils は土壌調査、化学、肥沃度などの Division からなっており、1964年以来フィリピンで土壌肥沃度調査を続けてきている国連のチームもここに office をもっている。BPI は水稻の品種に BPI-76 と

* 地学関係者の接触すべき Bureau of Mines もその一面である。

いうのがあることからわかるように、育種、栽培、病虫害などの研究を行なっている。かつては普及も受け持っていたようだが、現在ではこれは Agricultural Productivity Commission (APC) に委ねられている。

フィリピン人の主食として重要な米とトウモロコシに関しては、その生産計画の立案・調整の機関として Rice and Corn Production Co-ordinating Council (RCPCC) というものがあり、これはいわば先に述べたような諸機関を横につなぐ役割を果たしている。灌漑計画の立案・実施などは National Irrigation Administration (NIA) の仕事である。

これらの諸機関は、フィリピン全土をいくつかの地域にわけ、そのおのおのに Regional office をおいてその地域での事業を統轄している。Soils の場合の地域区分は、(1) ルソン西北部、(2) ルソン東北部、(3) ルソン中部、(4) ルソン南部(ビコール地域)、(5) ヴィサヤ西部 (パナイ島、ミンドロ島など)、(6) ヴィサヤ東部 (セブ島、レイテ島など)、(7) ミンダナオ西部、(8) ミンダナオ東部、となっているが、さらに細分されようとしている。ちなみに州 (Province) も、次々に分割されており、現在の州の数を正確に知っているものはフィリピン人の間でも少ないようである。

そ の 他

フィリピンでの野外調査における特殊な問

題として、南部ルソンのソルソゴン州、サマール島、レイテ島にかけての住血吸虫病 (Schistosomiasis) がある。これは年間を通じて明瞭な乾燥期のない地帯の低湿地に広がり、水田は最も危険である。われわれは腰までのゴム長靴をはき、ゴム手袋をはめて、この地帯の水田土壌の調査をしたのだが、暑いのと、細かい作業がしにくいのとで、はなはだしく仕事の能率を悪くする。ついには手袋をはずしてしまったのであったが、この場合2時間以内にアルコールでていねいに手を洗っておかなければならない。現地の農民は日々こんなことをしておれないので、その大部分が住血吸虫病におかされているとのことである。

フィリピンには多数の方言があり、同じフィリピン人どうしても言葉が通じにくいことがしばしばあることも考慮しておく必要がある。案内人を得る場合にも、それぞれの地域をカバーしている Regional office から人を出してもらおうようにしないと、實際上役に立たないことがある。しかし義務教育を受けた者なら多少とも英語を話すので、日常生活をする上ではどんな田舎でも言葉の問題はほとんどないということを付記しておきたい。またミンダナオ島の回教徒 (いわゆるモロ族) 地域では、言葉だけでなく、生活習慣が異なるために、キリスト教徒のフィリピン人はあまり近づきたがらないことも知っておくほうがよいと思う。

タイにおける古生物学的 調査旅行

瀬戸口 烈 司*

1968年11月より半年の予定でタイ国で古生物学調査をおこなっておりますが、私のやっておりますのは古生物学といっても哺乳動物に関する古生物学調査であります。哺乳動物が地質時代を通じてどのように進化し、哺乳動物相がいかに変遷してきたかについて勉強するための調査でありまして、具体的調査方法は化石をさがし出すこととあります。動物のからだのうちでかたい部分が化石として残ります。つまり歯と骨です。ですから、骨をさがして歩くのが私の仕事ということになります。

哺乳動物の化石は土木工事などの際に偶然地層の中から発見されることがありますが、これはきわめてまれなことでありまして、石灰岩の洞窟の中から発見されることがよくあります。たとえば中国南部の四川、雲南、広西、広東省では、石灰岩洞窟から豊富な哺乳類化石が見つけれられています。動物の死体が洞窟に落ち込んだり、動物が死後骨となつてから洗い流されて洞窟に入り込んだり、また、洞窟に住むヤマアラシなどの動物が食料として運び込んだ動物の遺骸がその洞窟で化石と

なったりするからです。しかしながら、今までのところタイ国からは哺乳類化石はほとんど得られておりません。ですから今回の場合、調査とは言っても、今後調査を継続し得る可能性の有無を確かめることが大きな目的でありますので、予備踏査の性格の強いものであります。私は今回の調査では石灰岩の広く分布する地域を調査地にえらびました。タイ国には、中部、北部、西部、それに半島部に石灰岩が広く分布しております。

現在住んでいる生物にしても、地質時代を通じて進化してきた生物の子孫でありますし、また、100万年先の時代になりますと、100万年前の生物として研究の対象となる性質のものであります。ですから現棲の動物も化石になった動物と同じ程度に重要な意味を持っています。開かれてしまった中部タイでは、現在の動物生活を見ることは困難でありまして、開かれておらない北部、西部タイの山地のほうがあるので勉強には都合がよろしい。

そんなわけで、今回は主な踏査地点として西北部のメーホンソン (Mae Hong Son) 周辺と、西部のカンチャナブリ (Kanchanaburi) 周辺をえらびました。

メーホンソンの町は、チェンマイ (Chiang Mai) の西方、ビルマとの国境に近い山間盆地にありまして、チェンマイ周辺を京都の山城盆地に対比するならば、メーホンソンの町は亀岡にあたるといったところですが、実に静かな町です。この町を北から南にパイ川 (Mae Nam Pai) が貫いておりますが、パイ川はサルウィン川 (River Salwin) の支流であります。景観も、チャオ・プラヤ川 (Mae Nam Chao Phraya) の流域とはがらりと変わり、中国の雲南、ビルマ北部とほぼ同一の生態的環境を持つ地域であるという印象を強く受けます。

メーホンソンの町とチェンマイをつなぐ道路は、メーホンソンの南のメーサリアン

* 京都大学東南アジア研究センター

(Mae Sariang) を経由してチェンマイに至るものと、東のパイ (Pai) を経てチェンマイの北方チェンダオ (Chiang Dao) に出るものがあります。前者の道路は最近整備されて今では普通乗用車でも通行できますが、後者についてはパイに至る区間は単車以外は困難であります。前者の道路とて整備されたのは最近のことですから、自動車による交流は今のところほとんどありません。ですからトランスポートーションは、週4回チェンマイと結ぶ DC 3 型機による空路にたよっております。天候が悪くなると飛行機の運行は中止され、そうなるとチェンマイとの交流はいちじるしく困難になります。飛行機の運休される機会の最も多いのは3月と4月であります。山間部ほぼ全域にわたって終日かすみかたなびくからで、1カ月以上運休が続くこともめずらしくないそうです。雨季は6月ごろから10月ごろまで続きますが、終日雨が降り続くことはないので、晴間をぬっての運行は可能なようです。雨季でも運休されるのはほんの数回で、他の時期は故障でもない限り運休はめったにないそうです。

今年 (1969年) は2月下旬から運行はストップしました。私はたまたまこの時期にメーホンソンで調査をおこなうためチェンマイまでやって来ておりましたが、山間部の視界の悪さは絶望的で、いつになったら運行が再開されるか見通しさえたちません。私はタクシーをやとってメーホンソン入りを行いました。費用と所要時間を飛行機の場合と比較しますと、飛行機なら1人170バーツ (1バーツは約18円) でほぼ40分、タクシーでは700バーツで途中の休憩も入れて8時間。これでは割にあいません。ただしタクシーの場合、相乗りすれば割安となります。私の場合は相乗りする相手はおりませんでした。

メーホンソンの町の周辺の山々はほとんど石灰岩からできておりまして、洞窟もいたる

ところにあるようです。洞窟の所在地は住民から聞き出します。しかし洞窟へのアプローチがたいへんであります。案内人と荷物をかついでくれる連中の協力なしには調査はできません。メーホンソンの県知事 (Governor of Changwat Mae Hong Son) に事情を話して協力を依頼しますと県知事は実に気軽に私の要求に応じてくれて、県庁 (Changwat Office) に勤める agricultural officer を liaison officer として派遣してくれました。officer は農業技術指導のため各村々を常に歩きまわっており、地方の実情に精通している数少ない一人です。56才。実際、村人は彼のことをアチャン (先生) と呼んでおります。彼は英語を話せます。タイ語を話せない私にとっては貴重な存在です。

遠くはなれた山の中の洞窟へは、キャラバンを組んで行く以外にアプローチの方法はありません。案内人、荷物をかついでくれる連中の人選、食料、およびそれに要する費用は原則として officer に一任します。スケジュールについてだけ実情に合うよう officer と相談して決定します。宿泊は途中の村であることを原則としますが、距離の関係から野営することもあります。食事はもちろん米を主食にして、ニワトリを主体にした副食をとります。シオとトウガラシで主に味付けをし、野菜はキャラバンをしている途中でとれる野草を利用します。米、ニワトリは各村々で必要な分だけ買い込むようにします。1人がかつげる荷物の重量は 20kg 以下。1.5m ほどの竹の両端に荷物を入れた竹カゴをつりさげて肩でかつぎます。荷重が一点に集中しますので、なれない私がためしにかついでみますとかなりしんどい。両肩と背中全面、それに腰で荷重をうけて背負うキスリングの場合とは大ちがいです。かつぐということと背負うということとは大いに異なることであると妙なところで感心しました。一日にかせげる

距離は平均して 20km, 費用については, 案内人 1日20バーツ, 荷物をかついでくれる連中は 1人 1日15バーツで, 途中必要な食費はすべて私が負担します。私, officer, 案内人は原則として荷物をほとんど持ちません。荷物の量は調査用具, 身のまわり品, 食料共で 4人がかつげる量になったので, 総勢 7人でキャラバンを組むこととなります。1日の食費は30バーツ以内。私もほかの連中も酒をよく飲みますので, その費用が 1日10バーツ。ラオ・カオ(白い酒の意)というモチ米からつくった酒を各地で手に入れることができます。

キャラバン中の必要なことはすべて officer にまかせて, 私自身で準備する必要のあるものは, 調査用具, 衣類少々, シュラフ(寝袋), 懐中電灯くらいなものです。石油ランプは洞窟調査に必要ですが, 野営するときにも大いに便利です。雨の心配は雨期以外はする必要はありません。気温は日中 30°C をはるかに越しますが, 夜は冷えますのでセーターを必要とします。キャラバン中は私はゴム草履をはいておりました。小川をジャブジャブ渡ることがよくありますから靴はかえって不便です。

村人の多くは農業を生業としますが, 農閑期には狩をするハンターでもあります。散弾銃を持っている村人が多くいますのでハンティングによく連れて行ってくれます。シカの仲間, サル, リス, ヤマアラシの類がよくとれます。とくにサルの仲間の種類が非常に多い。私が見かけたものだけでも, テナガザルの類 (*Hylobates*) 2種, ニホンザルに近い仲間 (*Macaca*) は 3種にのぼります。キャラバンの途中ではテナガザルの声をよく耳にします。それに聞きいるためキャラバンを中断することもしばしばです。同行する連中のその声をまねる姿がこっけいです。

蛇足ながら, キャラバン中のポリス・エスコートの必要性の有無について県知事に意見

を求めたところ, 全く必要としないであろうという答えでした。事実, メーホンソンはどこでも静かなところで, その必要は全くありません。officer が同行してくれている限り安心しておれます。

ただメーホンソンは, 非常に広いことと, アプローチが容易でないため, 調査のための時間は十分にもつ必要があります。

もう一つの調査地カンチャナブリでは主にノーイ川 (Kwai Noi) 流域を調査してまわりました。ビルマとの国境をなすテナセリウム山系に源を発する川ですが, この川沿いに第二次大戦中日本軍が鉄道を敷設したことで有名な場所があります。「戦場にかける橋」, 「小説泰緬鉄道」の題材となったあの鉄道であります。

カンチャナブリの県知事は, 私の調査に対して, 各地方で警察の協力が得られるよう便宜をはかってくれました。これは護衛という意味からではなく, タイ語の話しぬ外国人が一人でウロウロ各地を歩きまわることとは何かとまちがいをおかしやすいからで, 身分保証を兼ねた案内人の役目をつとめてくれるためのものです。おかげで警察の好意ある協力を得て調査をすることができました。

ノーイ川沿いの主要地は, ビルマ国境に近いところから, サンクラ (Sangkhla Buri), トンパウン (Thong Pha Phum), サイヨック (Sai Yok) とならんでおりますが, これらの地方へ行くには利用する交通機関がたいへんです。カンチャナブリからサイヨックの中心地ワンポー (Wang Pho) へは鉄道を利用します。所要時間は約 2時間で 1人 6バーツ 50サタン (100サタンが 1バーツ)。ワンポーからトンパウンの中心地タカヌン (Tha Khanun) へはノーイ川をのぼりくんだりする乗合いのモーターボートで行きます。十数名乗れる大きさのもので定期便があります。のぼりは 1人 60バーツですが, くだりは 40バーツ。6時間

から7時間かかります。タカヌンから先は足の確保に苦労します。主に木材を運んだり、物資を輸送するトラックがタカヌンを基点にして各地方に時々行き来しておりますが、定期的ではありません。テナセリウム山系はメーホンソンの山々にくらべてそれほど急峻ではありません。トラックの通れる道路が各地にひろがっています。

私は、まずワンポーとタカヌンの間のノイ川沿いを見てまわりました。サイヨックのポリスのキャプテン（キャプテンは階級称ではなく、職称。地区指揮官）のはからいで、ポリスを1人案内役につけてもらいました。英語が話せます。モーターボートは定期便を利用したのでは望むところに乗りついたりすることが困難なので借り切りしました。5日間契約でガソリン代も含めて1350バーツ。その間の運転手の食費は私の負担となります。宿泊は川沿いの民家に泊まります。川沿いいたるところに民家があって、ポリス、運転手の顔見知りの連中ばかりです。1日の宿泊費、食費、酒代は平均して100バーツくらいです。

川沿いは一面石灰岩でできていまして、洞窟の数もきわめて多く、とても5日間ではすべてを見てまわることはできません。中には日本の秋芳洞の規模をはるかに上まわると思われるものもあります。そしてこれらの洞窟は同時に考古学的発掘をする必要のあるところでもあるようです。土器、石器がかなり多数手に入ります。

川沿いの住民はここでもハンターであります。夜ごとにハンティングに行きますが、主な獲物はシカとサル仲間です。シカの類は皮、肉、枝角が商品として取り引きされます。

タカヌンではトンパプンのポリス・キャプテンの好意によって、日数を短く区切ってポ

リス3名とジープを提供してもらいました。洞窟調査には協力者が必要となるであろう、というのはからいからポリスを3名も派遣してくれました。トンパプンで広い範囲にわたり踏査し、集中して試掘することができたのは、こういった協力があつたなればこそですが、これらの好意ある協力に、私はどうお礼をしたらよいのかその方法を知りません。

トンパプンの周辺は一面竹林でおおわれていますが、この竹林の中をジープで走りまわっているときに気がつく一番大きなことは、野性のニワトリの数が極めて多いこととあります。20日近く費やした旅の期間中その姿をはじめ目にした時、ニワトリであることに気がつくのにかなりの時間がかかりました。これらのニワトリは家畜として飼われていたものが野性化したものではなく、オリジナルに野性のものであります。ニワトリの家畜の起源の地は東南アジアであるといわれていますが、なるほどつくづく感じます。

私は今回の調査期間を通じて単独で各地に調査に出かけましたが、つくづく感じることは、どこへ行ってもひじょうに好意ある協力を得ることができたということです。これらの好意なしには私はなすところがなかったであろうと、心底より感謝をいたしております。

それともう一つ。英語を話す人々が日本とは比較にならぬほど多いと思われる点です。これは英語教育のタイ国と日本の方針のちがいのあらわれかと考えています。タイ語をほとんど話すことのできない私にはひじょうに好都合でした。そのせいか、タイ語のほうはたいして上達はいたしませんでした。この点残念であります。

(1969年3月記)

ジョクジャカルタにて

土 屋 健 治*

ジャカルタ＝スラバヤ間を1日1回連絡している寝台急行のビーマ (Bima) 号に乗って午後3時30分にジャカルタ中央駅を出発すると、このディーゼル機関車はジャワ島北海岸をチェリボンまで走ってから南下し、ジョクジャカルタ及びスラカルタ (ソロ) の二つの代表的な中部ジャワの都市を經由して、翌朝8時半頃スラバヤへ到着する。私がこのビーマ号に乗って、はじめてジョクジャカルタ駅に降り立ったのは、1968年11月30日の払暁、午前3時過ぎであった。以来3カ月余り、ジョクジャカルタでの生活を送ってきたが、町の印象と大学の様子について、狭い見聞であり雑駁ではあるが、以下に若干記してみたい。

ジョクジャカルタ市の印象

ジョクジャカルタ (Jogjakarta) は、この国の人々によって「歴史の都」(Kota Sedjarah) 「学術の府」(Kota Beladjar) と名付けられるにふさわしく、しっとりと落ち着いた町である。町は、マタラム王朝 (Mataram) の宮殿 (クラトン=Kraton) を中心に、ほぼ正方形に広がっている。クラトンからまっすぐ北へ伸びているマリオボロ大通り (Malio-

boro) は、商店街、官庁街の中心でこの町の唯一の目抜き通りであり、ジョクジャカルタとソロとを結ぶ街道、ソロ街道の北側地域と、ソロ街道と平行して走っている鉄道とこの街道にはさまれた地域は住宅街を形成し、クラトンの南と西の地域及び町の中央を南北に流れるチョデ川 (Tjode) 周辺地域は、カンポン (kampung) が密集している。町は、ことに住宅街は緑と花にみち溢れ、それは実にかがやかしく美しい。

ジョクジャカルタの朝は小鳥の鳴き声とともに始まる。町の人々は、たいてい朝5時から6時の間には起きて、水浴び (マンディ=mandi) と朝食を済ませる。いわゆる富裕な人々の家に雇用されている使用人 (たとえば私の下宿は、主人がスマトラのパレンバンの駅長で、留守宅に夫人と6人の子供がいるが、ここでは、料理人の老婆が1人、洗濯を主とする30代の子供連れの女が1人、さまざまな雑用をする少年が2人雇われている。彼らは、食事と寝台、年に1~2回衣服が与えられる。他は、月にせいぜい300~400ルピアの現金収入があるだけである。) は、家人よりも少なくとも1時間前には起きているようである。学校は朝7時から12時半頃まで、商店や官庁も8時から1時頃までである。午後は、ほぼ5時から8時半頃まで商店街が再び店を開いている。他に午後から夕方にかけて授業を行っているいくつかの高等学校、大学もある。人々は、午後1時過ぎに昼食をすませて、2時間くらい昼寝をし、夕方再び水浴びをしてから7時すぎに夕食をとる。食事は、私の下宿先を例にとると白飯に野菜スープ、テンペ (tempe) と呼ばれる大豆を発酵させて作ったせんべい状のもの、時に塩魚か鶏の肉あるいは野菜料理、これらを、唐辛子をかじりながら食べるのである。しかし朝食は、タピオカ (tapioka) で作った代用食にお茶一杯位であり、町の多くの人々は朝食なしで済ませて

* 東京大学大学院(社会学研究科)

いる場合が多いという。使用人は家人の残り物を食べている。夕食後は近所の人々が集まってジャワ語のおしゃべりを続け、夜10時頃には、眠りについている。

先にも触れたように、商店街はマリオボロ通りに沿って発達している。私がきて以来、物価はほとんど安定を続け、米価—ジョクジャカルタで上等米1キロ35ルピア、普通米で25ルピアくらい—は、やや下り気味である。それに呼応してか、ドル＝ルピアの交換レートも3カ月間にジョクジャカルタで3回にわたって変わり、1ドル400ルピアから370ルピアにまで落ちた。奇妙なことに、ジャカルタとジョクジャカルタでは、交換レートが異なっており、ここでは常に、ジャカルタよりも1ドルにつき10ルピアほど低くなっている。これについては、「ここは、ジャカルタよりも物価が安いから」という説明しか与えられていない。私は、先に述べた民家の一部屋を借り、朝はパン食、昼と夜は別に中華風の料理を一品作ってもらい、家族とともに食事をしているが、食事代、部屋代一切含めて1月10,000ルピア支払っている。ジョクジャカルタへ遊学しているインドネシア人学生の場合は、普通で3,000ルピア前後、せいぜい5,000ルピアが本代、下宿代として必要な金額のようである。

マリオボロ通りで商店を営んでいるのはそのほとんどが、インドネシア国籍を取得している中国人であると言われているが、通りの両側にはぼ300軒からある商店には、われわれ外国人にとっても必要な品物（たとえばトイレットペーパー）を含めて、生活必需品はほとんどすべて揃っている。ただし、香港及び中国本土からの輸入製品を除いた輸入品はいずれも高価で、ことに日本製の繊維製品、化粧品、電気製品（テレビ、トランジスタ・ラジオ、冷蔵庫も並んでいる）の物価は日本の1.5～3倍くらいしている。ジョクジャカ

ルタの人々が常用している衣服、石けん、自転車（自転車は通勤、通学のもっとも主要な手段で、朝と夕方は町中に自転車が溢れ、その数は40,000～50,000台と言われている）などは、その多くが、香港、中国からの輸入品で、店頭価格は日本製品の約4分の1くらいであるが、これととも、町の人々の現金収入の低さと、米価の安さから考えると決して安価とはいえないように思われる。

町とインドネシア各地を結びつけているのは、週3回、ジャカルタージョクジャカルタースラバヤードンパッサルを連絡している飛行機、1日1回スラバヤージakarta間を走っている前記のビーマ号とバンドン経由ジャカルタ行き、スマラン行き等の鉄道、午後出発して翌朝ジャカルタに着く夜間急行バスがあり、近郊の諸地域にはバスが出ている。さらに、アンドン(Andong)と呼ばれる四輪馬車は、時に2頭立て、普通は1頭立てで、やはりジョクジャカルタの町とその近郊とを結びつけているが、馬の首につけられた鈴の音に風情が感じられる。近郊のデサ(des)から町へ農産物を運ぶのには、白牛が使われている。この牛車はグロバック(gerobak)と呼ばれる。アndonは、また、市内各地を結ぶ交通手段として、独立前までは自転車と並んでもっとも重要な役割を果たしていたという。しかし独立後、町の人々にもっとも親しまれてきた交通機関は、ベチャ(betjak)と呼ばれる自転車の前に乗客用の座席をしつらえた三輪人力車で、ジョクジャカルタだけでもその数は2,000台を下らない。ベチャは新車で1台30,000～40,000ルピア(ちなみに自転車の新車が9,000～14,000ルピア)の価格であると言われているが、自家用のベチャで営んでいる者はほとんどなく、彼らは主として中国人の所有者から、1日(24時間)150ルピア、半日75ルピアでベチャを賃借りし、距離、道路の状態、乗客数に応じて

10～50 ルピア で市内の各所を結びつけるのである。これが結局市内バス、市電のかわりをつとめている。時には、大人を3名くらい乗せて走るベチャも見受けられ、差し引きした平均収入は1日50～100ルピア位と言われているが、彼らは組合も持たず、熱帯でのその労働は厳しく、したがって労働寿命も短く胸を病む者が多いという。私自身は、自転車を購入してこれを愛用しているがたいへん便利である。

日本で聞かされていたジャワの暑さは、今まで雨期が続いていたせいかな、それほど耐えがたいものではない。それにしても、私の部屋に備えた寒暖計は、朝8時から夜12時すぎまで、28度と31度の間を往復している。しかし、夜の戸外は風が涼しい。雨期にはほとんど毎日午後から夕方にかけてスコールがくる。日本の夏のように雄壮な積乱雲がいきなり空をおおうというのではなく、午前中にところどころ出ていた雲が、午後には静かに空一面をおおい、やがて風がひととき吹きわたるとともに、すさまじい勢いで雨粒が落ちてくる。ほぼ2時間か3時間、この豪雨が続くのである。時には1日中、細かい雨が降り続くこともある。太陽は垂直に落下し黄昏の余情は感じられないが、午後から夜に変わりゆくほんのひととき、切れ残りの雨雲が赤黒く染まる頃、町にはイスラムの祈りの声が、高く張りつめた調子で響きわたる。それがこの町の一日のうち、唯一の緊張した時間のように思われる。

惜しみなく降り注ぐ雨は、しかしながら、エネルギー源として有効に利用されてはいない。水道は、雨期の住宅街ですら、夜間と昼間1～2時間、ちょろちょろと出る程度であり、こちらの人々もこの「水道」の水は一度わかしてから飲むのである。停電は今までに二、三回経験しただけであるが、カンボンのほとんどは電気が入っておらず、石油ランプ

が使われている。付近のデサでも事情は同じである。結局、インドネシアで近代文明の恩恵を享受し、また享受しうるのは、都市のごく一部の地域と人々に限られ、その「都市」ですら都市としての基本的な機能を果たしていないように感じられる。同じことが、この国の膨大な「官僚群」についても言えるように思う。この国の主要な就職先として、実に多くの役人を抱えたまま、近代的官僚制の役割をほとんど果たしていないのが、この国の役所仕事の現状ではないだろうか。私自身のいくつかの体験からにすぎないが、そう感じられる。

ジャワの夜は暗い。街の夜もネオンサインに飾られるということはない。雨に降りこめられてマリオボロの大通りに立ちつくす夜など、昔ながらの白壁やわずか1メートルたらず道路に向かって張り出されたひさしの下で、身にまとった1枚の布切れで雨露と寒さをしのぎながら眠りにについている家なき民（彼らはデサやカンボンから行商にきたまま街で夜をすごす者か、あるいは純然たる乞食）を見ていると、ふいに芥川竜之介の「羅生門」が思い出されたりする。しかし晴れた夜は、ほとんど北天近い頭上で、オリオン座がかがやく。そのきらめきは凜冽そのものである。やがて乾期に入り、日本に夏が訪れる頃、さそり座や射手座はさらにどれほどきびしくひかりかがやくことであろうか。それをみつめるのが待ち遠しい気持である。

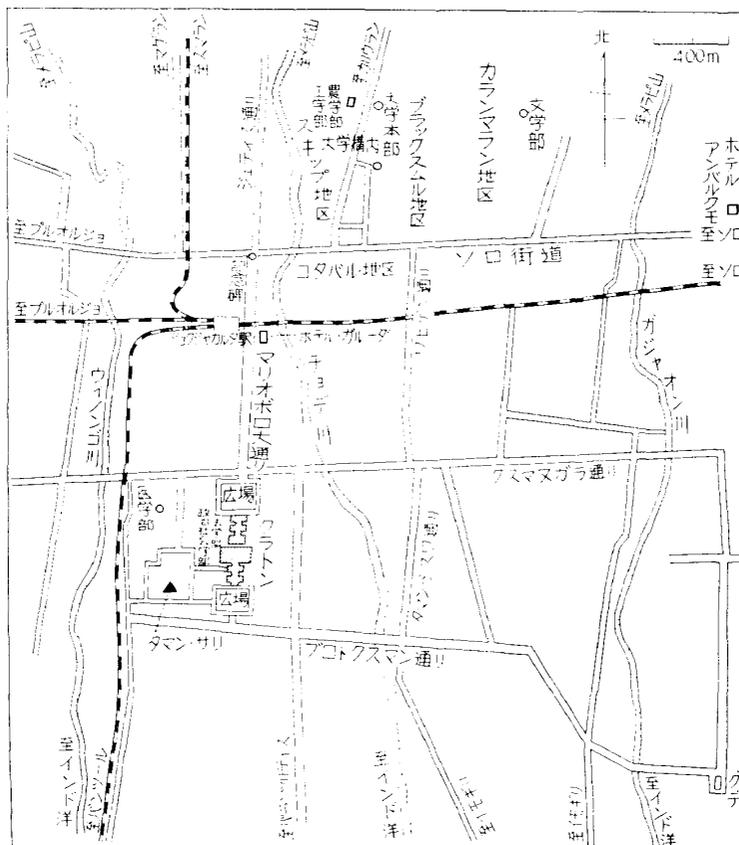
ガジャマダ大学——とくに 文学部歴史学科について——

「歴史の都」「学術の府」ジョクジャカルタには回教系及びカソリック系のいくつかの私立大学があるが、この町のみならず、ジャカルタにあるインドネシア大学と並んで、この国のもっとも代表的な教育研究機関の中心は、いうまでもなく国立ガジャマダ大学(Uni-

versitas Gadjah Mada)である。ガジャマダ大学は、1946年3月3日に創立され、1949年12月19日以来、国立大学となった。ガジャマダの名は、かつて東中部ジャワを中心に強大な王権を築いたマジャパヒト王国(Madjapahit, 1293~1521)を隆盛に導いた名臣、ガジャマダ(Gadjah Mada 1300?~1364)にちなんだものである。現在学生数、学部数ともにインドネシア大学を凌ぎ、地域別出身についての統計をもたないが、アチェから西イリアンまで、全インドネシアから学生が集まっている。私がジョクジャカルタに着いて以来、大学は学年末の長い休みに入っており、ようやく3月中旬から講義が始まる予定で、大学についての詳しい記述はできないが、いままでに入手できたいくつかの資料をもとにしながら、私が聴講生として籍をおいている文学部――

正確には文学文化学部――歴史学科を中心に、その現況を紹介してみたい。

ガジャマダ大学には、現在、法学部(Fakultas Hukum)、経済学部(Ekonomi)、政治社会学部(Sosial dan Politik)、文学文化学部(Sastra dan Kebudayaan)、心理学部(Psychologi)、哲学部(Filsafat, 本年度より新設)、医学部(Kedokteran Umum)、歯学部(Kedokteran Gigi)、工学部(Technik)、薬学部(Farmasi)、獣医畜産学部(Kedokteran Hewan dan Peternakan)、理学部(Ilmu Pasti dan Alam)、生物学部(Biologi)、農学部(Pertanian)、農業工学部(Technologi Pertanian)、林産学部(Kehutanan)および地学部(Geografi)の17学部があり、学長には1968年12月以来まだ30代のスロン(Soeroso)氏が就任している。学生総数は



ジョクジャカルタ市街略図

1968年12月31日現在、新入生を含めて、男11,538名、女3,617名、合計15,155名である。学部別学生数の内訳は表1の通りである。また、付属研究機関を含む教職員数は同じく昨年末現在で5,601名、その内訳は表2の通りであるが、専任教授はわずか48名、学生300余名に1人となっている。

17学部のうち、法学部、政治社会学部にはクラトンの一角が使用され、医学部、獣医学部、歯学部は市中央にあるが、それ以外の諸学部はソロ街道の北側、市の郊外にあたるブラックスモール (Bulaksumur)、スキップ (Skip)、カランマラン (Karang Malang) の諸地域に散在している大学本部はブラックスモールにある経済学部内におかれている。また、工学部、経済学部、法学部の3学部はジョクジャカルタの北北西約40キロにあるマゲ

ラン市 (Magelang) に分校をもっている。

ブラックスモールおよびスキップ地区は田畑を切り開いて作った住宅街であり、キャンパス周辺には大学関係者の住宅が多い。ここから北方は中ジャワの雄大な活火山メラピ山 (Gunung Merapi, 2,911m) の裾野につらなり、田畑とやし樹が緑一色でひろがっている。カランマラン地区には田畑に囲まれて平屋建ての校舎が4棟だけぽつんと建っており、このうち2棟が薬学部、あとの2棟が文学文化学部 (以下文学部と略称) として使用されている。文学部の1棟は研究室 (教授用の個室はなく、学科別の一つずつ研究室がある。)、図書室、事務室に充てられ、他の1棟が教室として使用されているが、その不足はおおうべくもない。

文学部は文学科として、イギリス文学科

表1 ガジャマダ大学学部別学生数

1968年12月31日現在

学部名	新入生			在学学生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
法学部	156	106	262	1576	637	2204	1723	743	2466
経済学部	206	93	299	1476	297	1773	1682	390	2072
政治社会学部	212	95	307	1250	424	1674	1462	519	1981
文学文化学部	62	73	135	408	291	699	470	364	834
心理学部	83	48	131	174	94	268	257	142	399
哲学部	90	7	97				90	7	97
医学部	117	37	154	854	154	1008	971	191	1162
歯学部	32	33	65	155	116	271	187	149	336
獣医畜産学部	108	42	150	260	58	318	368	100	468
薬学部	52	45	97	241	253	494	293	298	591
工学部	175	21	196	1473	151	1624	1648	172	1820
理学部	51	20	71	317	52	369	368	72	440
生物学部	40	34	74	81	77	158	121	111	232
農学部	146	25	171	536	65	601	682	90	772
農業工学部	72	42	114	218	97	315	290	139	429
林産学部	99	5	104	311	14	325	410	19	429
地学部	78	24	102	438	87	525	516	111	627
合計	1779	750	2529	9759	2867	12626	11538	3617	15155*

* マゲラン分校の学生数を含まない。

(付) 1969年度新学年は本年2月より開始、入学試験は昨年末に実施された。

表 2 ガジャマダ大学教職員一覧

1968年12月31日現在

学部 及 機 関	教 官 ¹⁾														小 計		職 員 計	合 計	
	教 授		教 授 待 遇		助 教 授		講 師		準 講 師		助 手		準 助 手		副 手				
	T ²⁾	LB ³⁾	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	T	LB	LB	T			LB
法 学 部	3	3	2		2		8	4	2		10	7	1		2	28	16	91	135
経 済 学 部	2	1			4	1	22	2	6	6	4	8	6	3	18	44	39	47	130
政 治 社 会 学 部	4	7			1	7	15	17	3	11	9	16	4	2	4	36	64	84	184
文 学 文 化 学 部	4	6			4	13	6	24	5	9	10	2	11	9	9	40	72	47	159
心 理 学 部		3			3	5	3	3	2	5	7	2		1	14	15	33	31	79
哲 学 部		1				4		3		6		1					15		15
医 学 部	12	2	1		11	8	15	9	13	7	93	24	28	9	83	173	142	235	550
歯 学 部	1	8		2	4	3	6	11	2	13	15	66	1	19	110	29	237	51	317
獣 医 畜 産 学 部	3	7			2	3	20	15	12	9	10	12	3	13	75	50	139	124	313
薬 学 部		7		1	2	6	12	9	3	13	6	28	1	38	103	24	205	66	295
工 学 部	7	7			7	7	13	25	8	24	14	20	7	14	188	56	285	158	499
理 学 部	4				2	4	14	4	13	8	2	6	10	2	57	45	81	121	247
生 物 学 部	2	3			2	6	4	4	2	6	7	13	16	6	75	33	113	65	211
農 学 部	3	13			5	4	13	22	11	2	19	16	24	13	18	75	88	173	336
農 業 工 学 部	2	8				7	3	17	3	12	7	15	5	12	51	20	122	46	188
林 産 学 部		4			1	6	8	13	2	9	2	9	9	22	57	22	114	52	188
地 学 部		4			3	2	1	3	6	4	7	6	20	14	10	37	43	23	103
B.P.K.K.C. ⁴⁾		3			2	6	1	9	7	9					81	10	118	31	159
B.P.A. ⁵⁾							5	5		3			1			6	8	30	44
B.P.M. ⁶⁾		1									4		5			9	1	21	31
本 部 事 務	1															1		1313	1314
マゲラン分校		6		2		3	1	40		13	8	5	2	7		11	76	17	104
合 計	48	94	3	5	55	105	170	249	100	169	234	256	154	184	949	764	2011	2826	5601

(注)

1) それぞれの役職名は次の通りである。

教授 = Guru Besar

教授待遇 = Pegawai Tinggi Golongan F/VI

助教授 = Lektor Kepala

講師 = Lektor

準講師 = Lektor Muda

助手 = Asisten Ahli

準助手 = Asisten

副手(学生副手) = Mahasiswa Pembantu (学生の中から採用されるもの)

2) T = Tetap 専任

3) LB = Luar Biasa 非常勤(他学部からの出向が多い)

4) B.P.K.K.C. = Biro Pembina Kuliah Kuliah Khusus 特別講義(パンチャ・シラ, 宗教等)作成事務局

5) B.P.A. = Balai Pembinaan Administrasi 行政運営事務局

6) B.P.M. = Biro Pengabdian Masyarakat 社会的奉仕事務局

(Djurusana Sastera Inggris), フランス文学科 (Sastera Perantjis), アラブ文学科 (Sastera Arap), インドネシア文学科 (Sastera Indonesia), 島嶼語文学科 (Sastera Nusantara) の5学科, 文化学科として, 歴史学科 (Djurusana Sedjarah), 文化人類学科 (Anthropologi Budaja), 古代史学科 (Purbakara dan

Sedjarah Kuno Indonesia) の3学科, 計8学科よりなり, 昨年末の学生総数834名の学科別学年別内訳は表3の通りである。

インドネシアの大学制度は5年制であり, 3年を修了すると学士 (Sardjana Muda), 5年を修了すると修士 (Sardjana) の称号が与えられる。修士号取得のためには試験と論文

表3 ガジャマダ大学文学文化学部学科別学年別学生数 1968年12月31日現在

学科名		第1学年			第2学年			第3学年			第4学年			第5学年			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
イギリス 文学科	新	9	24	33												9	24	33	
	在	6	9	15	8	16	24	12	22	34	24	17	41	3	17	20	53	81	134
	計	15	33	48	8	16	24	12	22	34	24	17	41	3	17	20	62	105	167
フランス 文学科	新	3	14	17												3	14	17	
	在	1	3	4	4	9	13									5	12	17	
	計	4	17	21	4	9	13									8	26	34	
アラブ文学科	新	3	1	4												3	1	4	
	在	1		1	7	2	9	7	2	9	10		10			25	4	29	
	計	4	1	5	7	2	9	7	2	9	10		10			28	5	33	
インドネシア 文学科	新	16	5	21												16	5	21	
	在	4	1	5	12	11	23	23	18	41	17	5	22	11	11	22	67	46	113
	計	20	6	26	12	11	23	23	18	41	17	5	22	11	11	22	83	51	134
島嶼語 文学科*	新	4	2	6												4	2	6	
	在	3		3	2		2	2		2	1		1	3	2	5	11	3	14
	計	7	2	9	2		2	2		2	1		1	3	2	5	15	5	20
歴史学科	新	15	2	17												15	2	17	
	在	17	7	24	44	12	56	27	20	47	17		17	36	13	49	141	51	192
	計	32	9	41	44	12	56	27	20	47	17		17	36	13	49	156	53	209
文化人類学科	新	9	25	34				1		1						10	25	35	
	在	13		13	28	22	50	26	42	68	4	1	5			71	65	136	
	計	22	25	47	28	22	50	27	42	69	4	1	5			81	90	171	
古代史学科	新	2		2												2		2	
	在	1	1	2	11	8	19	10	15	25	13	5	18			35	29	64	
	計	3	1	4	11	8	19	10	15	25	13	5	18			37	29	66	
合計	新	61	73	134				1		1						62	73	135	
	在	46	21	67	116	80	196	107	118	225	86	29	115	53	43	96	408	291	699
	計	107	94	201	116	80	196	108	118	226	86	29	115	53	43	96	470	364	834

* 島嶼語文学科は, インドネシア各地の種族語 (Bahasa Daerah), 種族文学を専攻するもの。

に合格しなければならない。博士課程は制度として存在しないが、この国での博士号は大学ごとに設けられた審査委員会によって与えられる。その数は少なく、すでに大学の講師、助教授になっている者が取得するのが普通であり、教授は他学部あるいは他大学の博士号のみを取得しようとのことである。ガジヤマダ大学では現在までに、医学博士、獣医学博士、法学博士、農学博士、心理学博士がそれぞれ1名ずつ生まれただけで、外国の諸大学から博士号を取得した教授のほうが多くなっている。

文学部歴史学科は、1年を一般教養として費やし、2年からインドネシア史と西洋史に分かれる。これらの講義内容を昨年度のものについて一覧すると表4の通りである。

歴史学科の教授陣は、教授 (Guru Besar) 1名、講師 (Lektor) 3名、準講師 (Lektor Muda) 2名、助手 (Asisten Ahli) 3名よりなり、この他に、非常勤 (他学部からの出向が多い) として教授2、講師5、準講師3、助手2名よりなっている。(1968年)

歴史学科主任教授のサルトノ (Prof. Dr. Sartono Kartodirdjo) は、1956年にインドネシア大学からこの国で独立後初めて歴史学の分野で修士号を取得、後アメリカ (イェール大学、シカゴ大学) とオランダに学び1966年にバンテン農民反乱の研究 (*The Peasants' Revolt of Banten in 1888*) でアムステルダム大学から博士号を授与された学者で、現在インドネシア歴史学界の最高峰と目されている。教授は今年3月より9月までシンガポール大学に招かれて現在不在であるが、その学究的な態度と穏やかな人柄とがあいまって、歴史学科の若い学徒達から絶大な信頼を得ているように思われる。サルトノ教授は昨年度インドネシア史のセミナーと歴史理論、歴史学方法論の講義を受けもっていた。

サルトノ教授はインドネシア大学の出身で

あるが、現在講師陣、助手陣のほとんどはガジヤマダ大学歴史学科の出身者で占められている。それらの顔ぶれをみると、ジョコ・スキマン (Drs. Djoko Soekiman, ジャワにおけるオランダ建築史の論文で1963年修士号取得、文化史担当)、スダルソノ (Drs. R. N. Soedarsono, 空想的社会主義の論文で1962年修士号取得、西洋史、西洋文化史担当)、イブラヒム (Drs. T. Ibrahim Alfian, アチェの年代記に関する論文で1964年修士号取得、歴史学セミナー担当)、ダルモノ (Drs. Dharmono, 19世紀ジャワの強制賦役労務省に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア近代史担当)、スハルトノ (Drs. Soehartono, 日本軍政下の中央参議院に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア近代史、民族運動史担当)、スケシ (Dra Soekesi Soematmodjo, タマン・シスワ運動に関する論文で1966年修士号取得、インドネシア現代史、民族運動史担当) などがあげられる。

文学部8学科から修士号を取得して卒業した学生は、1957年から1967年末までで144名である。文学部が現在の形で設置されたのは1955年であるが、これら144名の修士数は文学部全体の学生数と比較するとかなり少ない。文学部学生の多くが、3年修了とともに大学を去ること、それに論文作成のための時間と費用とが容易にはつくれないことがその理由としてあげられよう。

歴史学科についてみると上記期間 (正確には1961年～1967年) に修士号を得た者は42名である。これら42の論文について、私はその題目をみるだけであり、内容について現在のところ知りえないが、その題目に従って地域と時代に関して大まかな分類をし、その一覧を掲げてみると表5の通りである。これで見るとインドネシア史関係が圧倒的に多く、とくに65年以降は、インドネシア近・現代史、民族運動史関係の論文が著増しているのが目

表 4 文 学 部 歴 史 学 科

<p>第1学年</p> <p>基礎必修 (Dasar)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. パンチャ・シラ 2. 宗 教 <p>必 修 (Baku)</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. インドネシア史入門 4. 西洋史入門 5. アジア史入門 <p>選択必修 (Pelengkap)</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. イスラム学 7. 図書館学 8. 社会学入門 <p>語 学 (Pembantu)</p> <ol style="list-style-type: none"> 9. インドネシア語 10. 英 語 11. オランダ語 12. ドイツ語・フランス語 <p>第2学年 A. インドネシア地域</p> <p>基礎必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宗 教 <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. インドネシア古代・中世史 (Sedjarah Indonesia Lama) 3. インドネシア史史料 4. 歴史学方法論入門 5. インドネシア近代史 (Sedjarah Indonesia Baru XVI~XVIII) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. インドネシア古代・中世文化史 7. インドネシア共和国の国家組織 (Tatanegara) 8. 史料批判 (Kartografi) 9. マレー古代, ジャワの国家構造 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 10. オランダ語 <p>第2学年 B. 西洋地域</p> <p>基礎必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宗 教 	<p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 中近東近・現代史 3. 歴史学方法論入門 4. 西洋近代史 (16~18世紀) 5. インドネシア近代史 (16~18世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. インドネシア古代・中世文化史 7. 経済史 8. 国家思想史 (Sedjarah Kemikiran Kenegaraan) 9. ギリシャ・ローマ文化史 10. 史料批判 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 11. ドイツ語, フランス語 <p>第3学年 A. インドネシア地域</p> <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インドネシア近・現代史 (Sedjarah Indonesia Baru XIX~XX) 2. 植民地主義・帝国主義 3. 歴史記述の技法 (Teknik Penulisan Sedjarah) 4. 民族運動史 5. 東南アジア史 6. 西洋近・現代史 (19~20世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 7. インドネシア近代文化史 <p>語 学</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. オランダ語 9. マレー語, ジャワ語史料 <p>第3学年 B. 西洋地域</p> <p>必 修</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 植民地主義・帝国主義史 2. インドネシア近・現代史 (19~20世紀) 3. 歴史記述の技法 4. 民族運動史 5. 西洋近・現代史 (19~20世紀) <p>選択必修</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 西洋近・現代文化史
---	--

講 義 題 目 一 覧 (1968年)

<p>7. ルネサンス文化史</p> <p>8. イスラム文化史</p> <p>9. インドネシア近・現代文化史</p> <p>語 学</p> <p>10. ドイツ語, フランス語</p> <p>第4学年 A. インドネシア地域</p> <p>必 修</p> <p>1. インドネシア近・現代史セミナー</p> <p>2. 歴史哲学</p> <p>3. 歴史学方法論</p> <p>選択必修</p> <p>4. 文化人類学</p> <p>5. 選 択</p> <p>a. 東洋美術史</p> <p>b. 西洋美術史</p> <p>c. アフリカ史</p> <p>d. 西洋史文献講読</p> <p>e. 東南アジア史</p> <p>f. 社会学</p> <p>6. オランダ語</p> <p>7. 種族語文献講読</p> <p>第4学年 B. 西洋地域</p> <p>必 修</p> <p>1. 西洋史セミナー</p> <p>2. インドネシア近・現代史セミナー</p>	<p>3. 歴史哲学</p> <p>4. 歴史学方法論</p> <p>選択必修</p> <p>5. 外交史</p> <p>6. 選 択 (Aコースと同内容)</p> <p>語 学</p> <p>7. ドイツ語, フランス語</p> <p>第5学年 A. インドネシア地域</p> <p>必 修</p> <p>1. 近・現代インドネシア史文献講読</p> <p>2. 歴史哲学</p> <p>3. 歴史学方法論</p> <p>選択必修</p> <p>4. 文化人類学</p> <p>5. 選 択 (第4学年の選択と同内容)</p> <p>論 文</p> <p>第5学年 B. 西洋地域</p> <p>必 修</p> <p>1. 西洋史文献講読</p> <p>2. 歴史哲学</p> <p>3. 歴史学方法論</p> <p>選択必修</p> <p>4. 選 択 (第4学年の選択と同内容)</p> <p>論 文</p>
---	---

(注) 各課目の時間数は、いずれも1週2時間

立つ。日本関係の論文が多いのも注目される。歴史学科について修士号取得の時期を年齢別にみると、25才～30才 18名、31才～35才 16名、36～40才 6名、41～50才 2名となっていて、修士号取得の年齢が高いことに気がつく。文学部の他学科についても事情は同じである。総じていえば、これはこの国の研究条件の厳しさを反映しているものと言えよう。例えば、「洋書」は日本で購入する場合より安価とは言え、1冊 2,000～3,000 ルピアはしており、しかもインドネシア史関係の「洋

書」はほとんど店頭で見当たらない。ガジャマダ大学の教授クラスで月給が9,000～10,000 ルピア、助手は2,500 ルピア前後とのことで、いわんや定収入のない奨学金制度もない学生にとっては、本の購入すら思うにまかせないようである。インドネシア史関係の史料にしても、ほとんどジャカルタの博物館か国立文書館に眠っており、マイクロフィルム、ゼロックスの設備もない現状での研究は、多くの困難を抱えていると言えよう。

こうした現状で、なおかつ、若い歴史学徒

表 5 文 学 部 歴 史 学 科 修

- I-a. インドネシア (19世紀末までを扱ったもの)
1. ハマンクブオノ 1 世の建築様式 (1961年 4 月修士号取得)
Hamangkubuwona I dengan Seni Bangunan
 2. プラオサン寺院 (1962年 6 月) Tjandi Plaosan
 3. イジョ寺院 (1962年 6 月) Tjandi Idjo
 4. バタビアのシナ人反乱 (1962年 8 月) Geger Patjina
 5. ディポネゴロ戦争 (1962年 8 月) Perang Dipanegara
 6. ジャワとくにジャカルタにおけるオランダの建築様式史 (1963年 7 月)
Sedjarah Seni Bangunan Belanda di Djawa, Khususnja Djakarta
 7. 社会的宗教的側面よりみたるミナンカバウのパドリ戦争 (1964年 1 月)
Perang Paderi di Minangkabau, tindjauan dari segi sosial-religius
 8. 17世紀中葉のパレンバン——パレンバンとその周辺における胡淑貿易政策に関する歴史的
分析 (1964年 4 月)
Palembang Pertengahan Pertama Abad ke-17, sebuah analisa historis tentang
keadaan politik perdagangan lada didaerah Palembang dan sekitarnja
 9. 17世紀インドネシアにおける胡淑貿易 (1964年 5 月)
Perdagangan lada di Indonesia Abad ke-17
 10. アチェパサイの諸年代記に関する歴史的一考察 (1964年 6 月)
Sebuah Tindjauan Sedjarah tentang Hikajat Radja² Pasai
 11. 19世紀ジャワにおけるブパティ衰退の初期様相 (1964年 7 月)
Kemunduran keduluan Bupati² di Djawa pada abad ke-19
 12. パシル年代記の神話的, 歴史的諸要素の分析 (1964年 9 月)
Analisa tentang Unsur² Mitis dan Sedjarah² Babad Pasir
 13. バタック地方のキリスト教 (1965年 3 月) Agama Kristen di Tanah Batak
 14. フェン・ヘイツと1898年の政府令 (1966年 5 月)
Van Heutsz dan Peraturan Pemerintah Tahun 1898
 15. 18世紀における通商路としてのマカッサル (1966年 6 月)
Makasar sebagai Bandar Dagang pada Abad ke-18
 16. ジャワ賤民の諸内容 (1966年 7 月) Beberapa Hal tentang Orang Kalang
 17. 19世紀ジャワの強制賦役労働(者)の問題 (1966年 9 月)
Masalah Rodi di Djawa pada Abad ke-19
 18. スルタン・アグンのバタビア攻撃 (1967年 9 月) Serangan Sultan Agung Batavia
- I-b. インドネシア (20世紀以降を扱ったもの)
1. モハマディヤ設立の経緯 (1964年 1 月)
Sedjarah Sekitar Berdirinja Muhammadiyah
 2. バリ島南部の虐殺 (1964年 2 月) Puputan Badung
 3. ジャワにおける外国民間資本の定着と民族覚醒に及ぼしたその影響 (1966年 1 月)
Penanaman Modal Swasta Asing di Djawa Serta Pengaruhnja terhadap
Kesadaran Nasional

士 論 文 題 目 一 覧 (1961年～1968年)

4. インドネシアにおけるコーディアン派アフマディヤ (1966年2月)
Ahmadiyah Qadian di Indonesia
 5. とくに中央参議院との関連よりみたるインドネシア民族主義 (1966年5月)
Nasionalisme Indonesia, Khusus ditinjau hubungannya dengan Tjua Sangiin
 6. 民族運動の一側面たるタマンシスワ (1966年5月)
Tamansiswa adalah salah satu aspek dari Pergerakan Nasional
 7. 南スラウェシマリノ反乱との対決 (1966年7月) Konfrontasi Kita terhadap Malino
- II. アジア・アフリカ
1. アルジェリア革命 (1964年9月) Revolusi Aljezair
 2. インド独立運動 (1965年9月) Menuju Kemerdekaan India
 3. 19世紀中期における日本の近代化 (1966年6月)
Modernisasi Djepang pada pertengahan abad ke-19
 4. 日本におけるデモクラシーの発展 (1966年10月)
Perkembangan Demokrasi di Djepang
- III. ヨーロッパ・アメリカ
1. 西ヨーロッパの民族主義と民族運動 (1848年のフランス革命より) (1962年1月)
Nationalism and National Movement in Western Europe (From the French Revolution to 1848)
 2. 空想的社会主義 (1962年10月) Sosialisme Utopia
 3. アメリカ南北戦争におけるアブラハム・リンカーンの役割 (1963年7月)
Peranan Abrahm Lincoln dalam Perang Saudara di Amerika Sarikat (1861～1865)
 4. フランスの民族主義 (1965年3月) Nasionalisme Perantjis
 5. ドイツナチス権力の発生 (1965年9月) Tumbuhnja Kekuasaan Naziisme Djerman
 6. アドルフ・ヒトラー、独裁者となったその諸要因 (1966年7月)
Adolf Hitler, faktor² jang mendorong untuk mendjadi seorang diktator di Djerman
- IV. 国 際 関 係
1. ケープカイロ——近代イギリス帝国主義とアフリカにおけるその政策の特質に関する一研究—— (1963年6月)
Cape Cairo, sebuah studi tentang imperialisme modern Inggris dan Pelaksanaan tjita-tjitanja, di Afrika
 2. 政治的背景よりみたる19世紀初頭の東方問題 (1963年7月)
Persoalan Timur dalam abad ke-19 bagian Pertama, tindjauan latar belakang politik
 3. 1945年～1949年の冷たい戦争 (1965年2月) Perang Dingin di Djerman 1945～1949
 4. 第二次大戦後の日本においてアメリカ合衆国の果たした経済的社会的役割 (1965年2月)
Peranan Amerika Sarikat di Djepang dalam Ekonomi dan Sosial sesudah Perang Dunia II

表5 つづき

-
5. 1956年のスエズ危機——イギリス支配維持の失敗—— (1966年1月)
Krisis Suez 1956, salah satu Kegagalan Inggris dalam usahanya mempertahankan dominasinja
 6. ベトナムにおけるフランス植民地化の終末 (1966年7年)
Berachirnja Koloniasasi Perantjis di Vietnam
 7. パレスチナ分割をめぐって——パレスチナにおけるシオニズムとアラブ民族主義に関する一断面—— (1966年10月)
Menudju Pembagian Palestina (Suatu Pembagian tentang pergerakan Zionisme versus Nasionalisme Arab di Palestina)
-

たちが個人的なレベルではあってもねばり強い努力で研究を続けているのは、インドネシア史の再構築、即ち、インドネシア民族史を確立するという責任と自負とに支えられているからであろう。

このインドネシア民族史確立の問題は1945年の独立以後、たんにインドネシアの歴史学者のみならず、この国の民族指導者たちにとっても当然重要な問題となっていたわけで、1957年12月にガジャマダ大学で第1回全国歴史学セミナーが開催された時、そこでの主要なテーマもこの問題に絞られていた。このセミナーとここで取り上げられた民族史確立のころみについては、永積昭教授が「オランダ植民史観とインドネシア・ナショナリズム」(『アジア研究』14巻3号、アジア政経学会刊、昭和43年10月、pp. 15~30)の中で詳しく紹介しておられるが、現在のインドネシア史学界は12年前のセミナーで提起された諸問題といまなお取り組んでいるといえよう。そこで最後に、この文学部歴史学科に限って、この問題について触れてみたい。

インドネシア史をインドネシア人の手によって新たに書き直すという場合、それはオランダの学者が見出しえなかった新たな史料をとくに地方史について発掘すること、あるいは数多くの年代記を新たに読み直すことで

年代記の背後にある土着社会の文化に肉薄すること、このような作業とならんで(関連して)何よりもまず、歴史解釈の主体の問題、具体的には、民族自体の立場からしてどのような時代区分がインドネシア史についてなされるべきかという問題として、現在の歴史学者に意識されているようである。

例えば、歴史学科主任教授サルトノを編集主任としてこの歴史学科から1967年12月に第1号が刊行された『歴史学誌』(Lembaran Sedjarah)は、1968年8月に第2号、1968年12月に第3号(1号1,000部ずつ発行)が引き続き出されたが、その刊行の辞の中で、現在、歴史学一般とくにインドネシア史学を学ぶ学生のためのテキストの乏しきにかんがみて、これらの高等教育におけるインドネシア史のテキストとして使用可能な高度の歴史論文を掲載していくこと、そのために、翻訳ものではなく第1次史料にもとづいて作られたかきおろしの論文を掲載していくという抱負がうたわれており、特に第2号、第3号ではサルトノ教授自ら筆を執ってインドネシア史学の当面する諸問題に触れている。

ここでは第3号に載せた論文、「インドネシア史料の構造的側面」(Segi-segi Struktural Historiografi Indonesia)についてそのアウトラインを紹介してみたい。サルトノはまず、

時代区分の仕方が歴史家の立場と観点とをそのまま反映するものであることを述べたあとで、直接インドネシア史の時代区分の問題に触れ、従来オランダの歴史学者によって記述されてきたインドネシア史が完全に西欧中心、とくにオランダ中心の史観にもとづいており、「インドネシア史」という場合、それはたかだか、オランダ東印度会社の発展史かあるいは、オランダ民族の海外発展史にすぎないこと、従ってこのような史観は、彼らによってなされたインドネシア史の時代区分の仕方にそのまま反映されていることを、スターペル (Stapel)、フレッケ (Vlekke)、デ・グラーフ (de Graaf) の通史を取り上げて明らかにしている。すなわち、彼らがインドネシア史の時代区分を行なうとき、それはそのまま、東印度会社の盛衰史、あるいはオランダ植民地政策の変遷史と重なり合っており、インドネシア地域自体のさらに複雑で主体的な社会変動についてはほとんど無視されてきたことを強調している。例えば1500年前後からインドネシア近代史 (Sedjarah Indonesia Baru) が始まるという場合、それはこの地域にこの時期にヨーロッパの文物が到来したことによってひきおこされたのでは決してなく、東南アジア海洋地域におけるイスラム発展史、マラッカを中心とする海路貿易の隆盛と推移、これらと関連してひきおこされていったモジャパヒト王国のゆるやかな崩壊過程等々のなかでこそ、はじめて意味づけられるべきものであると述べている。サルトノ教授は次にオランダ中心史観のもつこのような問題点は、オランダ東印度会社以来、オランダ人が行ってきた史料収集の方向と方法に由来するものであるとして、インドネシア史の史料の問題に触れている。教授によれば、インドネシア自体の年代記 (Babad または Sedjarah, Hikajat 類) が、多少なりともヨーロッパ人によって着目されるようになったのは、よう

やく19世紀に入って、イギリス人ラッフルズ (Thomas Stamford Raffles) が統治して以来のことであり、それもその後オランダ支配の復活とともに十分なされないか、あるいは収集しても、それにもとづいて歴史を記述する場合には結局オランダ中心史観の域を出ることがなかったという。したがって教授は、現在のインドネシア歴史家にとって必要なのは、歴史史料について新たな点検を行なうこと、とくに伝統的な年代記の中から歴史事実を読み取ることであると強調し、彼自身、インドネシア地域の年代記をいくつか取り上げて、その物語性を洗い落としつつ、その中に含まれている文化史的な諸史実とそれらの関連とを読み取っている。

ところでサルトノ教授がここで一貫して述べているインドネシア民族史の構築という問題は、より具体的には、新たな時代区分をインドネシア史について行なうことによって、インドネシア史の標準的な通史を記述すること、とくに高等学校用の標準的なインドネシア史の教科書を作成する問題に係わってくるようである。今年の2月12日から3日間にわたって開催された「ガジャマダ大学文学部卒業記念及び修士同窓会学術週間」(Pekan Kegiatan ilmiah, reuni sardjana dan wisuda Fakultas Sastra dan Kebudayaan Universitas Gadjah Mada) の際、2月12日夜、ジャカルタから招かれて記念講演を行なったヌグロホ・ノトスサント (Nugroho Notosusanto) が、この講演の中でとりわけ強調していたのも、まさにこのインドネシア民族史の通史作成の問題についてであった。現在、インドネシア大学文学部歴史学科で講師を勤めるかたわら、国軍史編纂委員会 (Lembaga Sedjarah Pertahanan Keamanan) の委員長の任にある若い歴史学者ヌグロホは、「インドネシアの歴史家とインドネシア史」(Sedjarawan Indonesia dan Sedjarah Indonesia) と題するこ

の講演において、インドネシア民族が、何よりもまず、一つの民族として生活していきたいという主体的な意識によって構成されていることを強調し、スリウィジャヤ (Sriwidjaja) 王国ともマジャパヒト王国とも質的に異なる強固な新たな民族国家インドネシア——それは、1945年の独立によって形成され、パンチャ・シラ (Pantja Sila) においてその民族のエトスを表明したとヌグロホは語っている——にふさわしい標準的なインドネシア史が、今こそ執筆されるべき時であり、それを行なうのがインドネシア史学者の責務であると述べていた。さらに彼は、この標準書の執筆こそ、1957年の第1回歴史学セミナーで提起されていた問題の一つの帰結であり、この執筆のために、ガジャマダ大学、インドネシア大学、バンドンのパジャジャラン大学 (Universitas Padjadjaran) の歴史学者たちによって構成された委員会による共同作業が有効な手段として考えられると述べ、さらにこの民族史編纂委員会発足のための出発点として、第2回歴史学セミナーが近々開催されるべきではないかと述べて、彼の講演を結んでいた。ヌグロホが提起している第2回歴史学セミナーの具体的構想については明らかにされてはいないが、このままでいけば来年中にもこのセミナーがジョクジャカルタで開催されるのではないかと、歴史学科の一講師は語っていた。

その場合、第1にいかなる時代区分が、いかなる史料を基礎にして、いかなる方法論において行なわれるのか、また第2にヌグロホ

が述べている歴史学者による共同作業 (共同執筆) の際には、もちろん徹底的な討論が前提とされなければならないが、それにしても個々の歴史学者の問題意識の相違は十分生かされるのか、すなわち、個々の歴史学者の研究の自由を保障することと、共同作業によって標準書を作成することとは、どのようにして両立しうるのか、結局官製の歴史が書かれるという恐れはないのか、さらにこれらの2点と関連して、サルトル教授自身がフェンルール (van Leur) を取り上げ、ルールが広く東南アジア史の中でインドネシア史を捉えようとしていたことを評価しつつ、被植民地地域の中でインドネシア史を比較考究する必要に触れているが (サルトル教授前掲論文22～23ページ)、このような、いわば、インドネシア史自体を東南アジア、またアジア・アフリカの歴史の中で相対化する観点は十全に生かされていくであろうか、この相対化の契機として何がとりあげられるのであろうか、といった点については、インドネシア歴史学界の動向を追う場合の、私自身の一つの課題として考えていきたい。

付 記

本稿作成に当たって、タイプ刷りの資料「文学部便覧」1968年版を借して下さったイブラヒム講師の御好意に感謝する。

(1969年3月22日 ジョクジャカルタにて)

ミシガン大学の東南アジア研究

西 原 正*

アメリカは中西部にひろがる広大な農地帯の中に存する小さな大学町アナーバーは、ミシガン大学の所在地として、日本の大学人には比較的好く知られているが、この大学の東南アジア研究は、それほど知られてはいないようだ。この大学からは、まだコーネル大学の Kahin やロンドン大学の Hall に比類される東南アジア研究者が出ていないと共に、東南アジア研究の歴史が浅いことも、その理由であろう。過去5カ年間ミシガン大学に学んだ者として、同大学の東南アジア研究について素描と観察を試み、他大学の同類研究体制との比較参考資料としてみたい。

1930年代にフィリピンが米国の統治下にあった時、ミシガン大学の政治学部教授Hayden氏が副総督を務めたこともあって、大学図書館には戦前のフィリピン関係資料が豊富に収録されてある。また1950年代には同じく政治学部の Heady 教授（現在ニューメキシコ大学総長）が、フィリピン大学の行政学部設置の指導にあたったこと等から両大学の関係は緊密であった。しかし東南アジア研究が具体的に

* Graduate student, Department of Political Science, University of Michigan

軌道に乗ったのは1961年であった。その年、大学内に Center for Southern Asian Studies という Center ができ、1964年に改名されて現在の Center for South and Southeast Asian Studies となった。その名の示すごとく、東南アジア研究は南アジア研究と統合されて発展した。** それ以来 Center は大学の各学部属する東南アジア研究者間の交流を深め、資料収録や渉外事務の処理などの統一的運営を行ない、さらに後継者養成のための長期計画を立てる、調整連絡機関としての役目を果たしてきた。研究活動資金は、米国政府の Department of Health, Education, and Welfare の Office of Education とフォード財団の援助でまかなわれているが、独立した研究機関ではない。組織上は、大学の College of Literature, Science, and the Arts という、大学の中心的総合学部（この中には、一般の人文社会科学の学部が入る）に属する。従って Center に関係する教授は、Center 直属の教授ではなく、各専門学部より任免を受けることになる。各種の東南アジア関係の講義も Center が主催するのではなく、各学部のコースとして登録されている。Center はこうした講義の内容の調整や教材の準備や教授の外部からのスカウト、また関係学部と調整により教授の給料の一部または全額負担引受け、学生の奨学金の世話など、全体として、東南アジア研究体制が順調に運ばれるよう面倒をみる事務所である、とあってよい。

教授の紹介

まずここに集まる教授陣の紹介から始めよう。Center の教授陣は、1968—69年度で計41人であるが、そのうち、東南アジア地域の専門教授は、次の表1が示す13人である。これ以

** 以下には Center の東南アジアに関係した部分のみを紹介する。Center 全体の活動の紹介ではないことをご了解いただきたい。

表1 ミシガン大学 東南アジア

	出生年	Ph. D. 修得大学
文化人類学		
Burling, Robbins	1926	Harvard
Yengoyan, Aram A	1935	U. of Chicago
地理学		
Clarkson, James D.	1932	U. of Chicago
Gosling, L.A. Pete	1927	U. of Michigan
歴史学		
Steinburg, David J.	1937	Harvard
Wyatt, David K.	1937	Cornell
言語学		
Becker, Alton L.	1932	U. of Michigan
Gedney, William J.	1915	Yale
民俗音楽学		
Becker, Judith O.	1932	U. of Michigan (M.A.)
Malm, William	1928	UCLA
政治学		
Fifield, Russell H.	1914	Clark Univ.
Smith, Roger M.	1930	Cornell
社会学		
Ness, Gayl D.	1929	U. of California Berkeley

外にも Center に関係したスタッフ（例えば、図書館員）はいるが、ここでは講義をもって教授のみ扱うことにする。この表は、教授名と、出生年、Ph. D. 修得大学と修得年（1人は例外で M.A. のみ）、専門対象国、および主要講義題目を一覧表にしたものである。各人は、この代表的講義以外に、学部学生向けおよび大学院学生向け、また時には大学院でもセミナー、準セミナー（この説明は後です）向けにも講義をもっており、ミシガン大全体での東南ア関係のコースは、1968

—69年では57コースが数えられる。普通、数人の教授が交替で休職して現地調査に出かけるので、実質コース数は40くらいである。ミシガン大学は3学期制で、そのうち夏学期はアジア関係のコースは少ないから、残りの秋、冬の2学期で40コースを教えることになる。

表1をみてまず気づくことは、教授陣が非常に若いことである。1929年以降出生した、現在30才台の教授が半分以上（7人）おり、40～45才が4人で、併わせて、45才以下が13人中11人を占めている。そしてこのうち、10

関係教授リスト（1968-69年度）

Ph. D. 修得年	専門対象国	代表的講義題目
1958	ビルマ	Language and Culture Tibeto-Burmese Linguistics
1963	フィリピン	Ethnologies of SE Asia Peoples and Cultures of SE Asia
1967	マレーシア	Geography of SE Asia
1958	マレーシア・タイ	Geography of SE Asia
1964	フィリピン	Modern SE Asian History, Insular SE Asia, US Relations with Pacific
1966	タイ	SE Asia to 1300, SE Asia from 1300 to 1824, Mainland SE Asia
1967	タイ・インドネシア ビルマ	Thai, Indonesian, Malayo-Polynesian Linguistics
1947	タイ	Linguistic Typology of SE Asia Structure of Thai
1968	ビルマ・インドネシア	Music Cultures of Asia, Africa and the Pacific
1959	マレー・インドネシア	Music Cultures of Asia, Africa and the Pacific, Ethnomusicology
1942	全地域	International Relations of SE Asia International Relations
1964	カンボジア	Government and Politics of SE Asia
1961	マレーシア シンガポール	Social Aspects of Economic Develop- ment, Sociology of Modernization

人は1958年以降に博士号を修得している。このことは、ミシガン大学の東南アジア研究が大きな将来性をもっていることを示している。次に専門分野についてみると、社会科学および人文科学の専門分野はいちおう包括され、両分野の教授数も均衡がとれている。もっとも経済学、教育学、さらには哲文関係のスタッフが欠けているが、これは1969—70年度には補完されることになっている。

同じ東南アジア研究者といっても、各人の研究対象国はたいてい2カ国であるから、こ

の点からミシガンの教授陣をみると、タイ、マレーシア・シンガポール、フィリピン、ビルマ、インドネシア、カンボジアの6カ国に関する専門家がいることになる。最近の著作活動を中心に紹介しよう。タイの専門家としては、言語学者の Gedney 教授と A. Becker 教授がいる。前者はタイ語教育に熱心で、*English for Speakers of Thai* (in Siamese) American Council of Learned Societies, 1956. という共著がある。後者はタイ語の他に、インドネシア語、ビルマ語も教える。

“Burmese Tonemics” (*Papers of the CIC Far Eastern Language Institute*, Ann Arbor, 1965) という論文を書いている。タイ史の学者としては Wyatt 教授がおり、19世紀以前が特に専門で、最近“Family Politics in Nineteenth Century Thailand” (*Journal of Southeast Asian History*, 1968) を発表した。同氏は1969年よりコーネル大に転任する。

マレーシア、シンガポールに関しては、まず地理学者の Gosling 教授と Clarkson 教授がいる。兩人ともマレーにおける華僑の定着状況や同化過程に関心を寄せてきた。例えば、Gosling の “The Assimilation and Acculturation of Early Chinese Settlements in Northeast Malaya” (*Essays on Malaya and Indonesia*, Oxford Univ. Press, 1964) および Clarkson の “The Cultural Ecology of a Chinese Village (Cameron Highlands, Malaysia)” (*Univ. of Chicago Geography Research Series*, 1968) を参照。もっとも Gosling 氏は過去数年はタイの河川利用調査に従事している。社会学者の Ness 教授は、経済発展との関連において後進国の社会学的分析を行っており、特にマレーシア政府の経済発展計画に注目して、*Bureaucracy and Rural Development in Malaysia* (Berkeley, 1967) を著わした。

フィリピン研究家としては、文化人類学の Yengoyan 教授 (“The Initial Populating of the Philippines: Some Problems and Interpretations,” *Studies in Philippine Anthropology*, 1967) と歴史学者の Steinburg 教授がいる。氏は、フィリピンにおける日本軍政協力者の研究をして、*Philippine Collaboration in World War II* (Univ. of Michigan Press, および Solidaridad Publishing House, Manila, 1967) を出版した。これについては、フィリピンの現役政治指導

者を刺激したとの説もある。ビルマ研究家としては、文化人類学の Burling 教授と Becker 教授夫妻がいる。前者は *Hill Farms and Padi Fields, Life in Mainland Southeast Asia* (Prentice-Hall, 1965) の著にみるように、ビルマだけでなく、アジア大陸東南部の種族集団の生態の研究をしており、後者は言語、民俗音楽、演劇など、広くビルマ文学、芸術の研究をしている。夫人は “The Migration of the Arched Harp from India to Burma” (*The Galpin Society Journal*, March 1967) という論文を書いている。

インドネシア専門の社会学者はいないが、上述の Becker 教授がインドネシアの大学院学生への援助を得て、インドネシア語を教えている。カンボジアの研究者はアメリカにも少ないが、その数少ない学者の一人 Smith 教授が1967年ミシガン大の政治学部に招かれてきた。カンボジアに数年住んで、カンボジアの国家利益の観点から同国の外交の分析を試み、*Cambodia's Foreign Policy* (Cornell Univ. Press, 1965) を著わした。余りにも親カンボジア的だとかどで、タイにはしばらく入れなかったとのこと。本人も「カンボジア・ナショナリストだ」と自認しているくらい。

これら6カ国についての専門家以外に、東南アジアの国際関係を専門に研究しているのが、政治学者の Fifield 教授。同氏は東南ア外交史の分野では先駆者であり、1958年に *The Diplomacy of Southeast Asia: 1945-1958* (Harper) を著わし、その後、1963年に、*Southeast Asia in United States Policy* (Praeger) および C. Hartschaaf と共著で *The Lower Mekong: Challenge to Cooperation* (Van Norstrand) を書いた。前者は邦訳されている。また東南アのマレー民族地域を巡って民俗音楽をテープに集め、特異な講義をしている Malm 教授がいる。氏は本

表 2 分野別、志望学位別にみたミシガン大学の東南アジア専攻大学院学生状況（1967-68年の調べ）

専攻分野	大学院学生数			奨学金受給 学生数
	修士課程	博士課程	計	
文化人類学	—(—)	1(1)	1(1)	1
経済学	—(—)	—(—)	—(—)	—
比較教育学	1(1)	2(—)	3(1)	2
極東研究	10(4)	—(—)	10(4)	1
地理学	—(—)	7(2)	7(2)	5
歴史学	1(1)	6(—)	7(1)	1
言語学	1(1)	5(3)	6(4)	4
美術史学	—(—)	—(—)	—(—)	—
政治学	3(—)	16(1)	19(1)	10
社会学	2(—)	8(3)	10(3)	4
社会心理学	—(—)	1(—)	1(—)	—
社会事業学	—(—)	—(—)	—(—)	—
計	18(7)	46(10)	64(17)	28

注 1) カッコ内は女子の数。

2) Center の記録不十分のため数字には多少の加減がありうる。

来は日本音楽の研究家で *Nagauta : The Heart of Kabuki Music* (Tuttle, 1963) を書いている。

これら教授連の研究調査意欲も旺盛で、例えば、今年度は Burling と Gedney 教授が各専門国に赴いており、昨年度は Gosling, Clarkson, Malm の3氏が、それぞれタイ、マレーシア、インドネシアに調査に出かけた。1969—70年度には、Becker 教授夫妻がインドネシアで、Ness 教授がマレーシアとフィリピンでの調査に入る。Fifield 教授は目下、1945年以降の米国の対東南ア政策を再検討した分厚い書を執筆中。先述の新進で野心家タイプの Steinburg 教授は、フォード財団の援助を得て、同僚数人とチームを構成して、東南アジア史を共同執筆する計画をすすめている。このチームには、David Chandla (カンボジア史専門)、William Roff (マレー史)、John Smail (インドネシア史)、Alexander Woodside (ベトナム史)、および David

Wyatt (タイ史) らが加わるとのことである。

Malm 氏は「タレント教授」なる言葉がピッタリくる学者で、「祭ばやし」や獅子舞を学生の前で演じてみせるかと思うと、数年前には、東南アジアの民俗音楽に関心を示し、Mrs. Becker 教授と、ガメロン同好会を結成した。大学にはガメロン・オーケストラの楽器一式が揃っており、同好会員も50人に達している。去る2月にはコンサートを盛況のうちに催した。この Malm 教授とは対照的な温厚で口数少ない Smith 教授も仕事に関しては劣らず意欲的である。東南アジアにおいて、東南アジア人による東南ア研究が発展するよう、その育成援助の任をフォード財団より受けてバンコクで仕事を始めた。このために、1969—71年の2年間は研究生活を犠牲にする予定である。Ness 氏が中心になって、マレーシア研究に従事する教授が、最近同国を紹介する教養テレビ番組を編成し、ミシガン大学テレビ局から放送している。

Smith 氏のように、研究調査以外の行政的
活動の分野でも、東南ア研究関係の教授は大
いに貢献している。Steinburg氏は会員4,300
人を有する世界最大のアジア研究学会といわ
れる Association for Asian Studies (AAS)
の事務局長であり、Yengoyan 氏は、この協会
の発行する季刊誌 *Journal of Asian Studies*
の Book review editor であり、この協会の中
で Interuniversity Southeast Asia Com-
mittee の設置のために主役を果たしたのは
Ness 氏であった。政府の国際開発局 (AID)
の諮問機関として、Southeast Asia Devel-
opment Advisory Group (SEADAG) とい
う、アメリカの東南ア研究にたずさわる社会
科学者で構成されるグループがあり、Ness 氏
はこのグループの事務局長をしている。他方、
Fifield 氏は1967年夏ミシガンで開かれた第
27回の International Congress of Orienta-
lists の事務局長を務めた。Gosling 氏は地
理学部長をしたことがある。

研究者の養成

ではこうした教授陣を擁する Center は学
生たちにどのような学問的恩恵を与えているだ
ろうか。もちろん、学生への「学問的恩恵」
をどういう尺度で計るかということは難しい
が、仮に東南アジアに比較的強い関心を示
す学生の数で考えてみよう。まず第1に、
Center の学生がつくった Southeast Asia
Club というのがあって、毎週金曜日の昼食
時に、各分野の教授や訪問中の学者、政府高
官を囲んで、非公式な昼食討論会を行なうが、
この会に出席する学生数が、一応東南アジア
に関心を寄せる者を調べる尺度になろう。19
67—68年度の出席者名簿によると、約130人
の名が載っている。このうち8割の約100人
が大学院の学生であるが、この中には南アジ
アにのみ興味をもっている者も入っている。

この約100人の学生を調べてみると、東南

アで学位を修得しようとする者は64人（うち
女子学生は17人）で、そのうち修士課程の学
生は18人（うち女性7人）、博士課程の学生
は46人（うち女性10人）という数字がでる。
その専攻分野別分布と何らかの形で奨学金資
金を受給している者の分布を表2にしてみた。
これによっても分かるごとく、政治学、社会
学、地理学、歴史学専攻が多く、現在のアメ
リカ人学生の東南アに対する関心分野を知る
目安の一助となろう。

表2はまた、Ph. D. 志望者が M.A. 志望者
と比べて圧倒的に多いことを示している。こ
れは大学自身が、大学院教育では Ph. D. 修
得志望者に重点を置いている結果による。事
実、28人の奨学金受給者の9割以上が Ph. D.
志願学生である。この28人の学生の中で、
Center から何らかの形で学資援助を受けて
いる者は、1967—68年度で5人しかいなか
った。残りは全部、学部か政府の奨学金である。
先述のごとく Center は、資金的には、学生
よりも教授の研究助成に重点を置く方針をと
っている。この点での、Center の学生に与
える物質的恩恵には限界があることが分かる。
しかし Center が、学生の奨学金獲得のため
に、全面的援助をしていることは、軽視され
るべきではない。

では知的恩恵はどうであろうか。この点の
測定も困難であるが、例えば、Center に関
係した学生で Ph. D. 論文を書いた者が何人
いるか、を調べることによって一つの目安を
つけることができる。しかし、この点に関す
る正確な資料がないので、ミシガン大で東南
アジア地域に関する Ph. D. 論文 (Center が
指導したかどうかにかかわらず) を、筆者が
大学の図書館の記録をもとに調べて、表3を
作成した。

この表は1955年以降のミシガン大で受理さ
れた Ph. D. 論文を専攻分野と提出年別に分
布させたものであるが (1945—55年には一論

表 3 ミシガン大学に提出された東南アジア関係博士論文 (1955年以降)

	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969-71 (予定)
文化人類学											○				
経済学	○				○				●						
教育学						●	●		●			●			1
極東研究							●								
地理学		●		○				○							3
歴史学															2
言語学										○		○		○	1
政治学	●				●		●	●	●						11
社会心理学														○	
社会学															3
計	2	1	0	1	2	2	3	2	2	1	1	2	0	2	21

	1955-61	1962-68	1969-71 (予定)
アメリカ人学生 ○	3	6	17
アジア人学生 ●	8	4	4
計	11	10	21

資料：1955-68年はミシガン大学図書館の記録による。
1969-71年は関連教授との会話より。

文も提出されていないようだ)、興味深い事実をいくつか示している。まず、1955—68年の14年間で二分してみると、前半の Center 設立 (1961年) までの7年間の論文が11で、後半の7年間の数は10となる。1962年以降に提出された論文をすべて Center の産物とみなしたとしても、この論文数だけで判断する限りでは、Center の貢献度はゼロということになる。ところが Center の1969年—71年のむこう3年間の論文予定数は少なくとも21となっている。これは決して大げさな数字ではない。目下、論文を書いている者が少なくとも10人、論文の資料収集のため現地調査にしている者が少なくとも3人、今夏より現地調査に出かける者が少なくとも8人、計21人が数えられる。また前掲の表2の Ph. D.

志望者46人のうち、2分の1が論文を完成させるとしても、約23の博士号が誕生することになる。この事実は貴重である。この種の組織の評価は10年くらいを単位にしてなされるべきことを示唆しているようだ。

表3の示す今一つの興味深い点は、前半期に比べて後半期ではアメリカ人学生の Ph. D. 修得者が倍増していることである。前半期では、アジア人即ち外国人学生による博士号が圧倒的である。これはミシガン大においてアメリカ人による東南アジア研究が着実に伸びていることを示しているようだ。ちなみに、1969—71年に期待されている少なくとも21論文のうち17論文まではアメリカ人学生によって占められる予定である。かく Center の学生に与える知的恩恵は多と考えられるべきで

あろう。

さて Center の研究体制の評価をもう一步進めて、後継者養成の制度はどうだろう。このために、まず、学生が東南アジアについて Ph. D. 論文を書くに至る過程を簡単に述べるのが適切かと思う。これには6段階がある。第1段階として、ミシガン大学では、人文社会科学部門の一般総合講義として、大学1、2年生向けに“Asian Studies”という講義を設けている。このコースは中近東から極東までの、文字通りアジア全域にわたり、しかも1年間で過去2000年の歴史を、政治や経済ばかりでなく、宗教や文化、さらにはアメリカの対東南ア政策にいたるまで、扱っている。つまり、こうしたコースによってアジア研究の入門的知識を施し、各学生に将来の専攻への準備をさせるわけである。このコース編成には従ってアジアの各地域研究センター、例えば Center for Japanese Studies, Center for Chinese Studies, Center for Near Eastern and North African Studies に関係する教授が協同で毎年の講義方針やテキストの選択に当たっている。

このコースの学生数は約200人。毎週4時間のコースのうち、3時間は各テーマに専門の教授が出向いて講義をし、残りの1時間は全体を10くらいのグループに分け、各グループに大学院の学生があてがわれて、助手として講義の補充をしたり、学生の質疑に応じる。

このコースを終えた学生は、第2段階として、3、4年生の期間に、専攻分野および地域の点で、より限定された範囲で扱われる講義をとる。例えば、社会学教授 Ness 氏が教える Social Aspects of Economic Development とか政治学教授 Fifield 氏の担当する International Relations of Southeast Asia とか。これが表1にかかげた講義題目に相当する。この後、さらに大学院に進んだ学生には、第3段階として、第2段階と同じ範囲のテーマ

で準セミナーが設けられている。準セミナーとは講義と討論とが約同等の比率で行なわれるコースで、ここでは学生はそのテーマに関しての基本的文献に目を通し、それらを基礎に30頁前後の論文を書かされる。準セミナーで発表させられることもしばしばある。この基本的文献は多くの場合英語で書かれたものであってよいのであるが、第4段階では、出来るだけ原語の文献や資料に接し、研究論文を書かされる。これがセミナーであって、この段階では教授の知らぬことを学生が知っていることも多く、学生は独立して研究調査を行なう能力がどれほどあるかによって評価される。筆記試験などはない。クラスも必ずしも毎週あるわけではなく、また場所も教授宅に移して、グラスを傾けながら議論を交すことが多い。

この段階を踏んだ学生は、これまでの知識を総合的に整理し、観察力と分析能力を身につけ、Ph. D. 論文を書く資格試験を受ける。これが第5段階で、qualifying examinations とか preliminary examinations とか、または俗に prelims といわれている。そしてこれに合格した者が、いわゆる Ph. D. Candidate という資格をもらい、最終段階としての博士論文書きに入るわけである。

この6段階の過程で留意すべきことは、Center はいずれの段階においても直接的責任は何ら持たないということである。Center は学位を授与しない。Center の任務は、学生の勉学方針の指導、論文資料収集の援助、奨学金の斡旋、などの大学側からみれば側面的に見えるかもしれないが、当の学生にとっては、また東南ア研究者を養成するためには、不可欠のものなのである。Center が学生に出す奨学金が少ない点を除けば、ミシガンの東南ア研究者養成体制は満足できるものだといえよう。

ミシガン大学の現在の東南ア研究体制に改善されるべき点があるとすれば、それは Center の方針である専門分野主義と実際の体制との間にみられるギャップではなかろうか。この相違は組織の若さによるところが多い。ミシガン大学では、東南ア研究をしても、この地域の専攻者として学位が授与されるのではなく、歴史学、社会学などの専門分野で与えられる。従って、学生は各自の専攻する分野での方法論、理論的枠組についての知識、理解力を身につけ、それを「東南アジア」という地域に適用する、という考え方となる。

この方針を貫いて、Center は一国集中主義を避けて、東南ア10カ国中、6カ国の専門家を集めた。しかもこれらの専門家は、自己の専門分野の知識と方法論を一カ国以上に適用し、比較分析することに関心のある人たちである。従って最初に紹介した13人の教授は1、2カ国についての研究をしているが、実際には、自分の専門分野の仮説的命題、方法論、分析手段の検索に、そうした専門対象国を使おうとしている人が多い。

ミシガンは、フィリピンとマレー研究に“強い”という世評を時折耳にするが、これは必ずしも正確ではない。そういう傾向はあったとしても決してこの2国にのみ重点を置いているのではない。

ともあれ、この専門分野 (discipline) 主義をとり、しかも東南ア各国の専攻者を養成するには、東南アの主要言語を教える体制ができていくべきである。しかし実際には、タイ語とマレー・インドネシア語のみの教習だけで、ピリピノ(タガログ)語、ビルマ語、ベトナム語、カンボジア語、ラオス語等の講座はない。Center は来年度には、マラヤ大学から Rama Subbiah 教授を招いてタミール語とマレー・インドネシア語文化の研究強化を計り、South and Southeast Asian Languages and Literatures という小分野を言語学部

に設けて、M.A. と Ph. D. を授与しようと計画している。これはこの分野を確立せんとする点では画期的なことであろう。しかし言語を研究の目的とせず手段とせんとする学生には、この新計画からの恩恵は少ない。特にタイ、インドネシア語を教えながら、両国に関する社会学者が教授陣に少なすぎるのは、研究体制の欠陥であろう。

東南アの言語学や文学の分野確立計画と並んで、Center は来年度にはもう2つの項目を方策に練り込んでいる。その1つは前述の“Asian Studies”の改良である。来年度には、このコースはアジア全域から東アジアを分離させて残りの東南アジア、南アジア、南西アジア(中近東)の3地域のみを扱うことになる。また学部学生で成績優秀な者で東南アジア、南アジアに特に関心ある学生に対して、3人ないし5人の異なった分野の教授を入れての特別セミナーを設けることになっている。

今一つの Center の方策は、Center の教授陣と大学の他の研究機関との協同研究体制の推進である。例えば、Center の社会学系教授と School of Public Health の Population Planning Center のスタッフとの合同セミナー“Problems of Population Control in South and Southeast Asia”を設けるとか、School of Architecture と合同で“Housing and Urbanization in Asia”というセミナーを設け、インドとタイでの公共住宅建築計画案を作成している建築学専攻の学生に、アジアの都市問題の特殊性を学ばせるとか、がこれである。

今一つ Center が試みんとしているものとして、「現地調査セミナー」とでもいうべき勉強方法がある。これは、Ph. D. 論文を書く資格のある学生数人が、東南アジアの一国を選び、共通のテーマながら、各自が独自の現地調査をし、定期的に現地でセミナーを開くという方法である。最初の試みとして、1969

—70年度には、政治学部と歴史学部で Ph. D. Candidate になった者6人が、社会学部の Ness 氏を主任として、フィリピンへ赴くことになっている。セミナーの教室をミシガンからフィリピンに移し、資料を大学図書館に求めずに現地に求めてのこの研究会は今後の社会科学者の研究方法を示唆しているようだ。もちろんこの方法が果たして初期の目的を果たすかどうかは、1年後をまたねばならない。

このようにみてくると、ミシガン大の東南アジア研究の今後の方向が明確になってくると思う。それは地域研究 (area study) 主義を避けて、専門分野 (discipline) 主義を基調としながら、これに分野横断的 (cross-disciplinary) アプローチを強調することによって、

従来の地域研究的アプローチとの新しい折衷をみせていると思う。

Center は、本年より3年間は、Ness 教授の後任者として、John Broomfield 教授が所長職につく。同教授はニュージーランド人で、1964年に Australian National University より博士号を取り、以後ミシガン大の歴史学部でインド史の講義を担当している。同氏の近著 *Elite Conflict in a Plural Society: Twentieth Century Bengal* (Berkeley, 1968) がこの度アメリカ歴史学会から推賞された。Ness 氏も Broomfield 氏も新しい世代のアジア研究者層を代表するもので、Center の今後の発展は注目に値しよう。

(1969年4月稿)